

令和3年（2021）

■ 10月15日（金）

季節は秋。木々も色づき始めました。

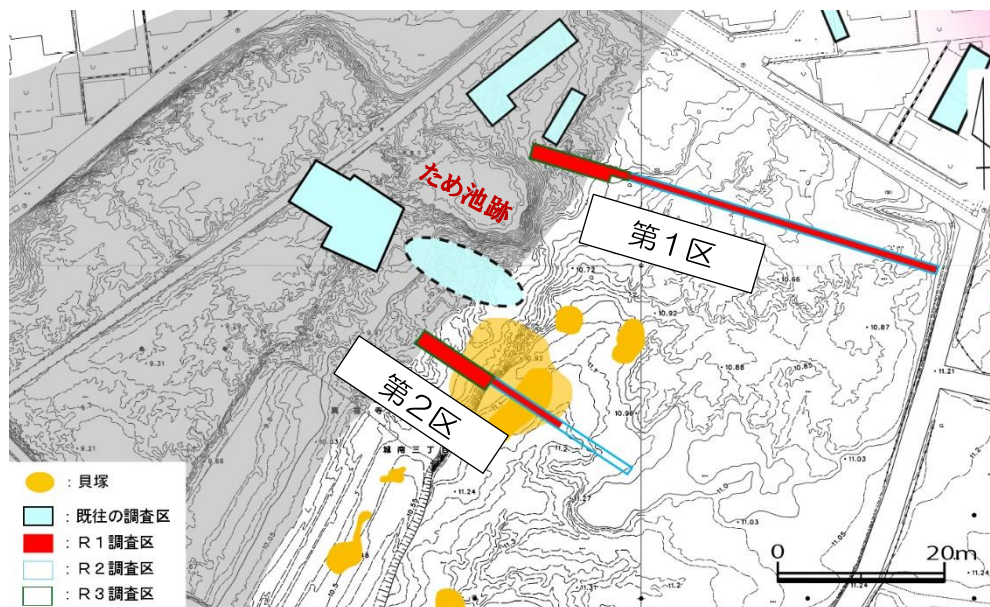


図1 調査区の位置

① 第1区（北側の調査区）の調査

調査区西側の調査を継続しています。引き続き2a層（暗褐色土）の調査を進めています



写真1 2a層の調査 ※左下の赤いものは、現生のザリガニ、遺物ではありません

令和3年（2021）

す（写真1）。^{らんたいしっき}藍胎漆器が出土しました！（写真2）。



写真2 朱色の漆も鮮やかな藍胎漆器



写真3 藍胎漆器（下側の写真は剥落した漆塗膜の内面側。よくみると縦・横のくぼみがついています。これが器の原形を形作った編み物の痕跡です。）

令和3年（2021）

籃胎漆器とは、竹ひご状の植物素材を網目状に編んで形を作り、そこに漆を塗り重ねて仕上げた漆塗りの容器です。大正15年（1926）に大山史前学研究所が行った真福寺泥炭層遺跡発掘調査の際に出土して以来、実に95年ぶりの出土です。

縄文人たちは、数多くの漆製品を暮らしの中で使用していたと考えられますが、通常の遺跡では有機質の遺物である漆製品は腐食してしまい、今日まで伝えられることは極めてまれなことです。そうした漆製品が残っていたのは、まさに真福寺貝塚ならではのことで、2a層の下層には、本格的な泥炭層の存在がうかがわれます。今後の調査への期待が高まります。

調査は、2a層の遺物の検出と取り上げに進み、籃胎漆器も水につけて応急処置を行いました（写真3）。籃胎漆器の出土状況も詳細に記録しました（写真4）

植物遺体専門の先生のご指導を受けて、籃胎漆器を検出した時の排土を水洗したところ、2～3mmほどの漆塗膜を複数点確認しました。

2a層の下には、炭化物を多く含む2b層（黒色土）が堆積していますが、その排土も水洗したところ、各グリッドから数mmの漆塗膜が複数点出土しており、その総数は10点以上になりました。

調査区西端の最深部は、これらの土層よりもさらに下層まで掘り下げています。この土層は灰色味を帯びており、層中には植物繊維が含まれています。おそらく泥炭層に到達したものと考えています（写真5）。



写真4 籃胎漆器の出土位置

令和3年（2021）



写真5 垣間見える泥炭層